

ちりはなし

田

いもじ

御おんばくだい

七日にまはりて、人さすむし、

うみなかのかへる

母には二たびあいたれども、父には一度もあはず、

三位の中將は何ゆへうたれ給ふぞ、

四季のさきに鬼あり

花の山ははなの木は、その森はは、その木、

梅の木を水にたてかへよ

鷹心ありて鳥をとる

嵐は山を去て、軒のへんにあり、

竹生嶋には山鳥もなし

道風がみちのく紙に山といふ字をかく

みやつかひかひこそなけれ身を捨て去はさかさまに引は何ぞも

情有人の娘に心かけゆふぐれことにこひぞわづらふ

もろこしにたのむ社のおればこそまいらぬまでも身をばきよむれ

永正十三年正月

〔後奈良院御撰何曾之解〕後奈良院天皇御撰何曾

はいたか

もみぢ

かながしら

ふちだか

尺八

つた

くちびる

なら火鉢

花あふぎ

山もり

海

應

風車

笙

嵐

八はし

姫小松

唐紙せうじ略○中